

安克昌『心の傷を癒すということ』新增補版を読む

4月24日にもレポートしたが、写真の485ページの肉厚の本を読み終えた。本書は1996年刊行の『心の傷を癒すということ』のほか、増補第Ⅰ部／被災地の復興と災害精神医学、増補第Ⅱ部／安克昌と本書に寄せて、新增補／神戸・淡路大震災から25年を経て、から構成されている。



本書は増補からも多くの示唆を得たが、安克昌『心の傷を癒すということ 大災害と心のケア』がメインある。第Ⅰ部／震災直後の心のケア活動 1995年1月17日～3月、第Ⅱ部／震災が残した心の軌跡 1995年4月～96年1月、第Ⅲ部／災害による〈心の傷〉と〈ケア〉を考える、から構成されている。

安さんの被災体験からはじまり、心の傷とケア活動の実践が生々しく書かれている。現在のコロナ危機における「心のケア」を考えるうえでも参考になることが多かった。何より読みやすい文章で綴られ、「心のケア」パイオニアとして奮闘しつづけた安さんの人柄を感じさせる。多くの示唆を得たが、第Ⅲ部のなかの「災害と地域社会」に注目した。震災後の神戸の「暮らし」・コミュニティについて、安さんらしく語りかける。

昔ながらのコミュニティは路地で成り立っている。路地を徒歩で生活できる範囲にコミュニティがある。今回、地震で壊れたのはほとんどが古い町だった。そして被害にあったのも老人が多かった。老人は新しい環境への適応能力がひくい。地震によってすっかり生活の基盤を失った老人たちは、とても傷ついていた。震災後、困窮する老人たちを見て、コミュニティはたんなる概念ではなく実体そのものであることを私は思い知った。古くからのコミュニティは、都会では老人たちにほそぼそと受け継がれていたのがある。彼らはまさにコミュニティによって生かされていたともいえる。このようにコミュニティは、人の「暮らし」を抱え込んでいる。だが、その一方で都市に住む人は地域に根ざした「暮らし」がしにくくなっている。道路を広げ、ビルを建てることによって都市の機能は発展するが、「暮らし」のうるおいは失われていく。都市におけるコミュニティの問題は、都市における「暮らし」の問題でもある。

コミュニティとは、地域における人と人との具体的なつながりである。だが、コミュニティは助けあいという美しい面だけをもっているわけではない。一方でコミュニティは、マイノリティの人たちを排除しようとすることがある。村八分や差別という残酷なことも行なうのである。たとえば、震災後の「ハネムーン期」においてすら、排除されようとした人たちがいる。精神障害者・外国人・ホームレスが、避難所で冷遇されたケースがあった。かつて関東大震災の直後、朝鮮人が混乱に乗じて井戸の中に毒を投入するなどという流言飛語が飛び交い、官憲や一般市民によって多数の朝鮮人が虐殺された。そのため阪神・淡路大震災の後には、韓国のマスコミが「今回は朝鮮人虐殺はなかった」旨の報道を行なった。

(2020年5月5日)